人あふきりし

一

むし

桜　桜

梅

[illegible]
火のくるま
ちりぞくぞく
かしのやま
さいのかわら
つるぎの山

ぢごくめぐり
[illegible]
塩
塩屋萬兵衛

尼ヶ崎 塩万 北之口

[illegible]

抑もく西ら三年う月三日のよ
あつまりいふめかりかどれやぞあ
そこなはみがとりていりはそうけ
そるそれ御まどとにきくしからず
の人わるとこへどもころしてある
ますあらいかたるやさうわるいぞ
はじてまかれとうけまればはごご
かしこまりてりわぐるやりそしとけ
ゆくさきちをそしはぎくこのとくよう
てきしかれとの御まうりしてやまかれ

岡田眞之藏書

のりまれはかゞて てまこれはいつくしく
わんしけるこれとも(は)なやうとそむけさ
せむてんのおそれわりさいかれい
ちときこえはたてまつるとやもゆまへと
まつりそらわざのうしろのやまへ
まふりやけるはなひみかようこゝろのお
かせとうしつててしやうしりこれ
ときこえそもみなすそやとわりければ
鱼そぞやけるいはちぢの人あるとさぶらく
まつれよのなみへとうしつてあひぞ

人あるまようつりくみかく二さうびま
りかくりくことはうぢやりけちやだめ
みづうもなえぞうりきよくしのげんざむ
もこれまでみつとそあつてごとみつやそう
うしりのこれとこそおみでといしやうみづ
ら御身とそぢうりうぢひきのうへまで
そだそこれぢちのぢいろしよとおしへども
やさらみつれむちうみかまつひくく
うろやしときつかさみひのいろのみくとう
しるひさまみみとのたまひくみぞ

とうざれゆり色てどもなそぐぐそた
ろけるところはいとこみわきいなのこゝ
うしひぞこれところじにあくいらう
とふぜんていとろつぎそ口しやくなすん
のてまろつしとわきいるてぐろ侭よのせ
てふりくありまとのにろれんごくらしだ
うさうひどものみつまんもてかくさ
ぼくところことろひでとあれなく
かりるすの二りんのうらにとそていそれよ
まてくみるたくびやまゐる（下 北まし

ほどなくびやうみうべくハなんらうざび
とうりくすちんてうけり色てぐ
これときひくなんよおりひあくび
なうむしやのたちうとにまとは
されじまれらうにふてうろく
とくずわまりるせちなまひそまう
たろふらのそこさふとのべ（たなう
ともいちど二ていしんとおりふう
ひと侭やてあさいると一てにくけまいず
あさいるこれとさてうらみくいひけ

かやうにちかるひまにいとひらくとうはし
一か二きりのくれなゐもをしるり
よろこびとまもりよりひでおはと
とこつけらやとわりなくども一人はされ
よてわまでしらすおそらさすまれらが
まくともあげてくれとのこまひていと
ほどびはこれもてみつ色でざその日
のきそくよいそくにいそうさうらひ
のつさふらくとさころはわりさせひと
みなのきかずすまいろれひくれはなと

とひまへでかこひけるほしけれとつ
らくひすひてくうりとしめてしろ
めまうくたびのしろこゝろだゝこゝろわ
うさうしそへてしやくぞはうの爲り
つゞめのうちうさうさのそてさけり
たいまつ十あさいのよせしへつきてさゝ
まゐらせしやしよつてのさうらひけら
にいとあはびしてゆけるは七るとやは
わがうんへしそれすまさてしていろかそ
たがしやしくとやしていろやうそいゝけり

さくちよふくの人〳〵これ〳〵とこそてゆきし
つきのかゝりひかりどおくれなるのいのした
あかりがごころみちうちおもしやらまつく
あくれなり さるれでよかそざいちや
のうち一ちやうゆきてこれだくら
よいしやとさしかるてさくあかくちらさ
すのことうきさるてさくかり子せきてと
くざりあしされども志あしあいまれたち
つらなくこびえ〳〵よちやうゆき
それぞれまくさ紀のせてとおそろしさ

ことなさんあし又かさんとこれた十七
八だりのあるよしらしみ十二ひら〳〵とうさる
てそれ多井のおとゝきとき三千十二さしと
ぐそくしちそくにそのゆびまでも
あいとのくらどもあらかんざしいせある
んとあら〳〵ちろゝまのここまのひとも
つてんことおりてまもしゆきとがかるちや
びんがみ三二ちろているいりのあらじ
もちすこととこてわかけてのたまへたさ
いぶりしこまりてやわぐあやうあく

よのくはつかひよそこうろみ一ぞくよやうぞみ
色そざくゐうかをとやとものそてしやし
けまでじ證じんでこれときこうしかま
とのつかいそてのあれまつてこうづうが
まへとどこともうしいぞかしてこそ
御かうばいのちをとろべしこれうかへまい
らへずしてこうづしとうしむみとのあひ
さまれど色てござおそろしさのあまりけ
さうどこれようかへりやうさんとて御いと
ましてかへりけるところは證しうじめ

たまひけるやいにうけんにくときりさるれ
たとそてまてのみちいかみわうせん御身い
つひそてあまるとてもみづしくところまゆて
あんらいてし十八さいまかりとおかうへ
こうう三十一といふんえるのころまるのて
くにのかたしけんよこぞとのこ海うみゐな
のちのちうひうよかてうれしゆへあさむ
りんとおこしてうめとしれおうまうま
あかされしゆさづくまろのへそこころ
色しろやくへれとおかせつれしそれじ

ゐてこれをうけ給つてこゝろつおそく
おりひかへりやしそその日みるめのこくに
いそやといでよろうきとかりのとのり
まいつてござともいらくやあげくま
じうみじのいろやのわくとこね井と
こゝろよけれはひきよこうくへ四ねれわり
きゝるやしいたまふくもきよつるやりか
しきりのいうぢの人あるとゆびして
まいれ四百ちるやりのゆらんわんとわり
それもしよこそのきうひたちきんぐん

なしけるいのちわつてにうきよつるやとも
わりけまきてころのみちいしよつるやうあふ
うせんとそいらんとやわかりかろうけると
こうよゐりのくにみちとらんまにろさの
四つたてつみとやへかみたりのだいしん
よい三十だい時くこの大きるぜんよい十二だ
いまさのぜんのきみちなくしたてつみき
ひちうよありつるやりわがきよつるやり八十る
六百ちやりりらうい海四百ちるやりとた
まわりて二千ちるやりまあしまりつんくりおく

くにはみかどやつくかうもこゝろやさしくひとく
はせんまいりや座りはしまつるやうと申とも
またかうのへあはせとさうしてまいらんと
すそれしかまへくらのさいしよさふ
らひおはしとくともおもひいらるゝも
のかうにきしくみゆとて座ぞてはんと
さされりたてまつるせきまうだしとふ
ものとてよめしいにみんなうけるは
うつみたてかしのまかいみかど
はくはん座とりふかしせんとありけり

じねんでしやまいすぎとりゆらも志
そんとありしゆへあるいまちまてのさふ
らひたちたつみとにくしやおがせん
ちゃうおやうす一人まされてあるわひざ
えそでぞんのかいちいとてみるへき
うそてにこさそのはのしやぞくまいらさま
いちつきこうひらせいりのおはくらよらん
のひとつれのたりしとむすんでかくつけ
たがしけをつくしそてきりのくうと
つゆゆくてまいうさがさくのたちとくさ

しろしめのさやまつさくれる井のわたりざさ
しきくこえどいかなくしゞのうりゐれふざ
御りをたまうるつゞやしよいゝたしうきこゐ
ゐるすけをりアやじけんわいそへてたま
川すみたいのをせそり七るとりしえんむま
のうくにまうりかくつくべしそれすぎて
こいろやのうらみくまてたるとおかし
めしくとりてにろれいろやのうらへぞ
ゆりよけりきそよらやしぐりゆきてこ
まじもみみてみしよへてしぐりゆきそ

これどもましてけごとのこさだんわもわんぞ
ゐしくこれをゆきすぎてもいろたち
とぬいそ空えしとうらへひこれどもみふ
りみし文三ぞやしぐりゆきてこれにろ
ゐんごくのごとく月日かしわりくれたまふ
まうへのわるところどこれにしあや
志やくびやうくるせりくびもみだれた
又たい嫁人のわりつくるとかへてうる
しとをこそすてうりこれとこうてこれで
のきとりとうるところのとといふてしろく

しおらきくづりまろみえよりおろるつ也い
志わしらくとびまとひくまにくうさく
かぜのおとゝひらつきさ又よりこふゑのよ
まことおしずからひぐきくときくとさい
志やじの祢子うりもさやあくべしさそれく
色りてこれじあうりのたまくとうねらう
らうひろのの志や色らもみしきんけ乃
ひらくとりつくひろと志ろしおるくとも
ほてらろとい又かくさつとこれどさいま
人のひきふれくるとあずくてうりのこと

とそらくれう一ゑんのこといおうじとう
らゝそておべまたそりて人上とどおらのの
みしきをとりてそえてらとどわとぢ
のけしきとおそてつまれうのされる
きんぶんのすぶれとけさう三寸ふ出也
こゝもぶおもろそてきいくといふひぐさいぎ
おんしやじ志やのかみよゑりそてとみへぜ
にろきこれとこそおもしろやぞくらくじやし
ともかく風んさそてみのてしとこそあれ
たじこすゑえことこれらじまいさくらんるると

まうしそうらうこゝろのうちこそどげんわうとげ
のうらみは、ちかまわりしはゝのうへはちゝぶ
だんでんとうふこゞめのひろのはしよわり
又とけはうけるえんしとこれ八十みけんは
かけられうらうてのまごとにこゞめのすゝ
とけうら一ぞんのすゝはやしわくしきんげ
こゝろしときんづうえてじやそれどのこうのすゝ
もしらぞそらへてけうらし、てふ八くえんと
一じもおときずきへはうそろさて八十
ぬはわらうすゝはかむはきんちてきしちや

うらうしくしときんづうこのこゝろしみくう
こゝよりてぬろんのちがしかくむかくはよう
せねんをいのる稲ひのくぞくとりて
わきのくいろさいのしのちがしとこれかと
みなこりふぶろだしかんとさんげうつらの
いけのなうませんよのきんげらうよしの
まんげあらこれてえゞのうハみしさ
あうにてこれとこそこくいかてきゞにお
のしろやしとおりひらうきゆしゆのうらは
いうてこれじ、まいしよ、にごめのとのべて志う

まことにみてはいしろきぬとのべてしてさこう
みさきよりいろりとのべくしろくれうさては
しよのうらへたちいりてみれどうらよう
うまてびんがのこゑそあまりのあはれ
わがすむところへきこゆるぞやとてそでまく
るはすこしとこまではくちよいしめとさし
ふるごとくおつぞくしやそのたけ二十で
ぞつのつはのい十六まるこは百八よわ
らくれうくいさい百でうたうよたち
みがりかむしのことくりそてまけりくれか

かみのごとくなるはえてさとうつりたまへだこ
のけをいようらおそろしさてとうぎりは
いりはにつたやまでとぞいつなるこのとくお
のりつんかちのせんげんといわつとなりな
ひらとされてこずつかすごとみするこそ
らういえがうんのさわかなりいつはにてさ
うけさほされこづつが六十えはいからさんで
ひろ三とのりへこずってなりなんでずりらる
ほろこぎくとこづつはそつせは六十えはおさ
あんとおはせわうけまたはにてさうけた

まうけとて四しやくはすんのたちをやかい
て大かうにたてまつるすなはちさうさ
まりのこくしにおうしくいそのかみさまと
をまうしけるよしとわりそれたかしこまつ
てとゆてさうのまへてたゞしやうてんたる
わうざやのはうとめつてこんりうたてまつ
つるそれよりおほくおさめたまへひうかき
あのるけけんとおさめてむすめの三ねう
のくらやすらしやしの祢子つもさやま
けのかゝるはうざめのうらびよりいて玉ふ

とうせんとぞくじやうすまとひこさ
んそて十七への ちごよめしのひてま
ゐやけつかんぞくのまめのこくらくらごく
とうくとも見る井あしときくときさいへ
せてくるんとけうとひたちのわきに
んさこたまひて六たいへぞおもしろきて
まひろまつさいのまろとうせんとお
かめしるまつせてまひておふちゆう
きらみやいけさうけさまくれちかく
のふざやいまつ一てんまくらそのぞんげん

二ぞんはしやかのぞんぎん三ぞんはまんくわん
ぜげん四ぞんは三ぞんぐはりめんぞんは五
まのぜげん六ぞんはさいのしたそやは
のぜげんされども一百三十六ぢごくのざ
いはこの六人へみなおやくるくんとんの
すいしやくなりみざ六人のぞうさいはよ
そもさそていうなりまつじざうなりそそさい
のうちにとうせんまへ七つ八つたらりのよ
とも二つ三つのおさなものかなしきやうぎ
とも〜くかなしはなきかそちくおろくは

よくりてまてところそそなげさ
なるはしとてくせんまんとも〜ずすきてにど
にうたいわづらひわまいうるそのは
てくとなせば天がさりきこてわれこ
うまれそておやのたいないは十月が
あひだくるしみをうけものとんとおくるゆゑ
してもなくくるしみそのうもきにつ
さてそのみくるしみることおそさびなり
このわうろうとみなとわりけきはに
てきうけたまりきてくたるやまひ

これしさくうりひのかしらにいでゝ
いてもうきとめとゝなつく成けるよ
けりみるまにくろくなりてうせにけり
さてきたくわうておほよともかつまつりく
ろなめてりてしとりてなつくとい
ひてちくとうてひえりとめくしくよろこび
あつてくくとうくるありあてとこれに
てのありしてあり、このうりとにこづ大が
ありうえ八一まんゆきゑんありひろひの
てきにうれおほしますさいまんのいや

とちざとうりびらんにゆとぶあまうけさ
まふこのうしとよい大おらにあらい
のけたんありかのりをわろりきでの
やさまつつやてまひいまにて道
こうきやちそきこうへうるきそのやさし
みりくしやぞせいまいそつひとゆせ
てけりりのたましぬきて成ま
みらとえいうそわとにみるさまししぬる
よりじうりけりふきやたひてしさにち
ととふりひしとしやくそんまかて

おそろしのほとゝとうせよとよだつり
されどたましゐうけとりてたいしやく
よやてせんのてんにきこしめされひとく
ゑんどうどとゆるされしやうりみかるざい
にんはありさまをつけておよどせ
ごくらくのつこりとのかれくとせゐり
きめのつくせんまんもうずらずすから
くたり大がみおかたつれけるやふ
これこそしやうよわりしとさむまう
うしにおもてきにとつけてはてくとはら

せずわしくつはとろりのあり すふりら
うしひまづわかしらせろしあらゑやり
ませひろこと一まん八みさいあゐみわれ
とこれにほうまぐのやましとてわりおは（ことも）
うきちくのつまざにざいんとさつまわさ
てせひろところもわり人つまぎのさま
のかれくとてろでりとりてせわれい
おしていされてちりけるとゆるよくて
たとへまばちしわまそひろくれるみよ
ことのしどこれはしやうよわりしときさ

おやのちゝをとそしてさこころくはすまま
なして一せのあひだおやはこひしやく
とおりもれうけうのこのくをとうしるこ
と一まんごふおりふれてとれてひのま
人ろづみおこ御まのごとくなりおんざ
いくをほんでなけいまけるこころもあ
まみださい人をとうくろうのみまゐらう
とのまもせて三百六十のほねつひよ八万
四千のけのあなもつけにくるとをこれで
おやさまさけぶところもおやにそこれ

いつわりのみそてしとかせでたいおゝろ
きうしめしわきてそしやでてそてえん
ぞんころとりうるりのこれくをとうしる
ことと三まんごふおりふくひとつとれで六ッ
のみちかわりそのほどはさるけころをと
ちやく一人おしまみすざい人どもあるま
つまかとけまれとたすけなまくてと返
めども老やでみそ孫んかうつをもやきず
かろきんはまいつてうもうけまでしみけ
はちひみてありしまぜてどもちろしるくおく

うちせうがてつはやうてきゆくもけんまおて
さうしまうてわきハいつなる樹をそてしや
せば大がきりきこてめしわかの志あけなそ
六ぞうかのけちぎしがきらなうざいへ
わしやむせらいてやしむとんがへその
わうまでみくちぎさしみ三やがしやとかる
るまとゝもなさゆくよりまちぞくまお
つるしとさたほけなまへとうげきやせ
どもなのちずくるまくそとうくうなう
志やぞなくすてしちざしがきるみ

まるりがりとゝなつるりのハたちまれく
すけてまなるるう志やだつよかゝうてお
うつきでとになむちぎしがきりとこなへ
よしよ志んなもこれとふれしうとおか
せられけるさてにてき申わがるやうし志
六だしとやしハなふくみてれぎて ぞと
申せじ大がきりきこうめしまゞの一ぞん
まぢづくだり二んまがきたゞし三ぞんま
ちくしやりだり四ぞんま志あしだり五ぞん
まにんだり六ぞんにてんだしとて六だり

ありければちゞくだりしとうせんにとてあれ
とみよりこのたまくじゞくしや三十すぢよ
あやひそかにとてみなぎひゞつはあん
おなりうてつきは百らぢやしぐりまたら
のかりみなきひゞつりおんなとところとは
とひせしつことうそわくれ母道大かざさ
川おわせられけるはにてさいけ海られ
これこそしやたふそてみちうけて二人
のおんうよひのとこがさせくるとも
このくとくるとと一千三百ざいあり

又あるざい人とうそれさへくまく紙
めうさいつぞそうざくとうられ又めくとめる
ふりのあうくろうずゐ此うすそうそる
づさとほくこさとてしまてむしとじくろ
孫のいかめがくいちせばおめうさけふこ
とうぞうあし大かさいのほしひけるは
これこそしやじふてきしやうあやよあ
つくりしたうそものあうこのくとうくる
本二千ざいあうみちれてとこれしめと
やうなともあう二道はおやのまくそくと

こゝろうるかづみつ又まはり八寸みづさ
三寸のちがさとうるづ〇みつらみそだし
みやうらてりのかう又ざいくとろう
てはさんて三じやくのみこふうすてまうこ
とひさよろうてあんみわうこれハしやぢ
みそおとく二人のうらみぢしたれとをこ
よろげをふうませうろあんるこのくそう
らろ井し字まん女子ぢしみう又ある称う
だし十二ひとくとうさ〇てうへよたらく
とくのまうしうとひさゝきくれのぢ

くりまろうくわるこれハしやぢふそけい
せひとたて三まくとむさふうみ重す
ぶうろりのくのぢとくくとうくろ又し
らをだしたいへうらこゐうてものわうこれ
ろしやぢよわうしとさおとこにたらく
おもまれんとそろさかうらとれるとめ
うらくとこのこせんぢんよいろとしわねあんな
こうくとうらてしとあ千あうこうみう又ゆきさ
すぢてこれぢくろ〇のつるくと三寸すぢ
つけてひきえられてきてうつあさしあう

これハうつけのうよわりまがしよにハず
めわまうそわりしが人めようさことなる
けんさんをするまくとうそハおりひみ
わりよろ子づらとうぎうゐし志られ人ごろ
きみハぶよむまれてけんぞくとうつくこと
三百よけんわりこのけん志くに一すじのひま
ととせかど文志るけみ一人もなくする
まうし三ぢよはけらそんとむ年すご年
とらけまどばなろくちりやみさんだん
まうともあのもゆすすぐにひけんはとうる

まつるうけさまられたむけ人へハおんなか
みつぞいおとうそたおんなみおりうみそ
みなかくでりよりがりハあいりんずすなのせ人
かしかくちりみせのたくあうぶはりり
て月よ一ぢのさけりとなうされだそゐ
わひらおとこのせしろよ禄やこともなろり
一禄人よつりて八千両いまうてみうくく
なろうとちずしてせんぞんよくそとこ
とともろくてちぐくよおつうことうろうむ
ぎんまれ又ざいくよくろうよみつうると二十

すゞつけておよどもおろすよりひきゝろ
てしよりとゝうそうこれハ志やくふかく
わが志よるやしまてもみこゝとしうれん
のぢたりとのけれさくと称くぶりくめ多了
とひひけおりしきみやうとひひまとうり
うゐとのむのよらぎくとくされわくいさい
百ぢやしぞうりはたらのかり人のけん凡
おこそうくみうり文きくとこれじらうぞの
の御まうわりいろくろさはしだりいくせん
まんともらずま志うずみらくうりそうま

ころぞのあこくどくうおわびらせん
ぞもらぞのかいろとおひぐしこのほう
だけどもと志てとりどいわぞとくおいまうし
いかせきうかせくろうとみぢしさえくに
うしやくせてろくりのおうこれいしやんぢ
抱つうるしくとどいうみてきてひてこれ
おきとして志よ人とひきみうらとま
うりしをのくやりかくとうくゐるとえ
百おつらすみりにてさうけくぬかれでんど
くとつくり称んぐくとさくしおまるここ

ろくとりてそつきんとんごろこむきんみ
そのよくりこさんがしそしくとなし
はそてまつまはかくむかしみつみえて
よひのくつまにのりてわしくらおしやと
いひてくろ゛よの志ろとりてあてられ
平禅んがわひごさうさ海よとさされ
いしの大らよまこめられてしやんわく
うつ海とえどもみぐくうじしらし
これさえしれしろのくまみみのや是禅ぎ
もそわりけるが志んでんをらぶやしさい

しくとくこごろころのまつりとぞ世ぞとも
ちろんのくつともまつりせさろまよろく
くちまんちごくはおつつありいろにさうさ
志やんげまつつり志よんよかうりつてよくよく
のかすまりしさこのい禅つざかんめつてあり
おがりかとおさめてつりふくてうのかを
禅さとつまそちごくはとさるかの
みえてとこ二十ひろんごろよめきそでて
らざうとうろておんみわりこれいしやじく
もてぢでくおそろしきとそてつてびくう

うるはしとくひくるつかまつりおのく
とうらうとみまんぐうなりぬらくたそ
うてきとそかへりうろまのなさとてつりの
のまへよりきてうろこのもたせけんよ
ところてなりぬことにおんなわりこれハ
しやんとふてそうすもなささげくとととうあ
なりしおとこよりひきうせてもちやく
きせころおんなりうくのくと七なかし
うくるなりぬことにたけ七しやくあり
なるえしとそそてねまへてくろずよみ

たつのくちよりいれて百よ三年に三合のわ
かうとしがりてこれハこなやりんしよき
ぬりとそんじようそそのみてもえじ一ぢしぶ
むじてわきのさへうぞりとおそしたまへと
そハそりてしきなりしとばしらうぞか
とけよかしんなるとしろてしもなくずつ
ぢんよまいる斗しなきものわれらと
うらこと丸子ぐしなりぬえんしころも
とうしよつけらぐくのぬのまうりとえ
しろりめくるかなゆこそつててまうけるが

されどもぢかうくみえたへいおちらどこれを
しやくふそうかうしよいいかされどもうこく
かうとのしもはそまねかしくそくへめ
ぶろうそごしやとじわずらうしよ
みそてないしんはいふかもたもつめ
わみちをうくるとと十ぢしみうえてうう
きさとちしわはそろうくれうみのぶく
みそてこのわすはいらぎとうれたう
いたいのたくみてわしらそうはつる
ぶくとみてまんとさうてあんふわりこれ

おうつはらくおもやわんとそたいふめ
みとおわりてわかいすてうるとのわみく
とううるしと一まん三千ぶうふみりさそこれ
とゆさすすぎそこれぞよらしとおわりさ
人ととげんとこそてうりのはらうずのく
ひらせと二十すらうけてむけんちづくり
おとさろてりのわりこれいしやぢふりく
みやとうりちろさうたにらろさりじを
すゑうろしがちやうりやつとそむさふげ
うせらうもののわるらくとうらうしと八せん

ごかうしそくとみまはばうかうてうろ
らしきなしんぐうかうらくとさげたま
のうしはのうてみしきのらくとさしけ
だいひのせようびをそてわのくだら三
ぶくさんかございのかうけうらくとわいかで
十二のかうらいそくにぎやくとかしらえ
とんせいしまんだいとさうけれかんの
じやうしんまりかうたまふこうのうらう
ひかうとえかうらたまふかうしんぐうかうれ
をひくらのらよさてだのせうはかるく

あまりこの人いかうさのしこよしまれちびい
とりかぐらしうへうるりのよいちさきと
わるへさしけかるりのよいつやうとしゑせ
月よ六どのひまのをいぶしさやくしあれ
こさをしかんかうとやしこかしとらやし
あしどせんぶやしとひさひんあるりのとぞ
んごろうさびやしごしあるかゆへはうり
かくのじくたらまうかとけはあるにうさ
うけくまかれしたうあどせんござしはす
ぐれうろくとくいかし三やくらはくうちは

人よこれをまてよ女らうぎよのわきを百
ぎやうまんろうそのなかまざい人とうられ
てらうぎよのつなよしうつさせてくるゝを
もろし女らうぎよのつなにてとりけてくら
とひらさおろくらたしやまれとたすけ
たゝへとはおさゝけくとも百らぎやうのおの
とまむせてかなひずこれはきやぶそ揃
ふなるをとりけくろうらの一とさしはやの
おまきみすこしとあくはくるとうること五十
まん七千ぎくるゝ女にいだしとさうさ候よ

なしてきてむくとまうしくろくさめのわり
これは人なんどからとやらなほきん人ほかれと
けなもおそれうやまうてどこやしたらは
ともらまず利人ゟうともやさずかり
たるともまうせずこのきづよろうあの
くをとうることもみずみうし文おま百人
しておるいそうそでざい人のむま
まとしけておすところのわうこれさ
きやんなそとうのなくにれそくてるあの
おのくるとうろう井一ぎざいなり文ゝに

あるじんよくきゝとゞけられておほきさけぬ
そのみずからぞわりこれはちやうよりわし
ときさくへとめさるゝにこまりすゝとつゝしむとの
おのゝどもとうちかしと五百ぞいらういり
にうけとまいれ一だいきやうしゆしふく
そんのわそくしうるこまりとこしまへる
すのはがろさいしよみちづくなりされど
一ぢもおりうる人とそうしきばたいけんよ
おつのり文一ぢともおもしぶるはかりりく
よわひとゝしずそれよろそしじやうやの

御とにまゐらりみ　あさ日よおんなの
まへとおつとしもけんのぶしありえこうと
これじはしやしとりうがくれんたぐれん
のこわりよこゝをそれんはつかしれておち
こさけぶるのおわりこれはしやうよてさん
ぞくらいぞくとしてくめいのちとたらい
おもしとんでとり文人のきゆさしとも
らぶしてゆきおりのうるにもせめつらひ
うるものくのでしくありいやうとさえんと
すまはばひのわむりしとありてさへけれしだ

こゝろにもかなはずかんよつゝしれかなし
むことし三百五十ざいなり又こゝにあま
ごぜのおゝこしのかみよいくぎとこゝしれたり
ハ四大くにのみそでゆるかりくろちを
みだしそこえじやうちでよところにこれ
えしやびんそなかべのさうりよあまに
なりつ福ろや久のしやあらしよう子まで
こ為をとし福にて久やにかことさげらば
おとこつよそでたりとひつ色こそうし
うきそうつろうしのれつたりやくめうし

さげておとこつまそでとひろくとこそく
さてもくむりしこえひりきのゝみとして
うせたろみこにつけてもありふかくごじよ
より六年六月のおひぐさるそ御よ大む
けんよおつろかり又きやびかそころお
れくりたろおんなくゝろめのくびちせと
けられて百らやいえいとひつせつれく
おあききげふりのおりこれいしやびかそ
おとこをおりくこのこしゆくよおのくとう
くろしと二百五十ざいなり又わしりのなり

よおまおんなおおわくいのみつささけずりのおわり
これさえやぶれそくいりのとどきにひとの
こころをいやくおりひのかとおちて
みなくとたてこころごろよりう年三万ぐ
あれくどうくるみり又によ人のうこささ
よりぬぐくもとえいぞうくとてよらりま
こそひさいまくざくどうろくのおり
これいしやぶふそうろやおとけまいり
すわりのそじいうまもたしくおりわが
かくらとこしらゆるまくとおんとしる

こずまうりあれくどうくることもなござい
みり又子のなさりのくこずれうくさとは
たゞ一人うらそてみむまうするはむけんのざるみつ
又うりおんなとそ月まてゞのさまりのる
きによ人も又たらひろうさのうえわり
むまれて七まんがうとつまるあさまれ
ども いのちのおるれどてうわがすらし
うきりおつそいのちつきるもたらはた
うるるみいのぞくたくおさのまみえ
くるのゆめのまくされでみるなさんへまる

いのみちらはごしやうとつちたへらはうけ
てぜんでんとおりひてごやしゆとすべき
かり又わきとこれでざい人とようそささ
まはひさごろて一ぢやうのゆしてとと
まつつるすりのかりこれハちやなをおや
まれもまそてもなさん人のおんとうろう
そのとんとれくゆゑてむろくみつる
そのかくのなじくかり又わるざい人のわし
てそのここぶりますてひさきらて抱わり
これハしやんぶそて座りみもろさまと

そうすそてくろりのおみくとうくるふ利
ぞそ太ぶろうおかせのれ京ろるのハこれ
ようがさだりとこ先んこれとみよとのこ
まひけるするからこそにざい人わるでこれ
じけりハ太ういくびハいとかしらハ志毎こせん
のどくかりいひいまへ（よわま）ともくりんと
すれぞくうえんてとかくそのり人（けまばくり
よもろんずようもひつもれしやくい
うやとれのふでりまてみすさま京より
これハ志やでふそてざいわりとりちふぶう

これもつてどましてくのやうみてもたそ
ずぜんぜんとじやすることもなくして
たゞやくしとおりつぐりにそまれをわ
さとうろにそてくるものあはれくとく
ることあ十まん一子ざいかうされじわう
かうわしめへしをいてやうともたてかこ
すことろどもさいやうよすべきかり
こやじいたてゆめまかりのよかりささ
のかやうまてぜんぜんとせざるよろて王
ひくよむまれてかかじともかるかぎずして

うらくかるんとこそいうらやこみるこもの
ごくとわしやくしとおりつかみるこのよみ地ぐ
こなかりされじぜんぜんとすれじわくらんハ
おらずみこくとこれじ子とうしこそてこう
ささくろうものわりこれハしやむふそい
とけかさみとうりてみとすざへるもの
おのくとうくるとこ二百五十ぐらかりし
米と一らうてられらのずのいとふく
くらとめいかさゞれてわしよくざとこれ
らしとかかすらず米いかくふうま

ここにそちハそれなるくと丸うしたるがごと
くなうこれハ志やそんでおる物とうさき
御よこうて人のやうなうてかく
すざうるものこれをとうるこというよ
ぐしおうて又おしとされじゃある人がいうて
くしてこがりとうさすがおりひのまつく
よりておしかつづきするこれハ志やでござそ
まづゆくすまそとおりひごしやりと一だい
ちよ福びひおりぬともませんでんとさ
しかくのでとくなうこれハみうものくま

御ざるのせうまひとつのにしだいかいと
えしやしきんといふなうれがんの志やしど
まてこの志やうしんときこえけるこぜ
のまよぶろハおろつまりうこぶよのだいしと
つくりたまのすゞれしとうけあうりのやう
らくとうせんよたまびうせ二千ものがさう
ハぶくとまうそへ宮でんハえうくとさうげ
この御そごのまうだいし志やうし志んかうぬ
とかうへさるふにうらしやでまて福ん
ござまつくへよきしゞされらうし志やう

だしとみえんとのたまひてすなはち
みをうまふひかりのくとをゆるそのある
あつるさうかりゆえやみよまとうり
みをつりやうさたちうるかまへせん
とすることうぞうあしみのけもよぶら
うろもうんせいつだろうかうえんくに
たうひみりうづるちくとすいぢさとす
されどはうざのさきうよかうりたりのゝ
みるこみのじろふりあんなてつとともつる
あさえくとろしがまんぢやまんある

さのいみるまへしたしはおもうつるござは
みをふれきうやうぶるあり三あくだしと
こせてひだりのかたにうつくとういてさ三
さんさうのちなはつきへつまふさるれどに
さんまのらくとみるは七さよはちぢとと
つきこゞのさんとそてそのうらはぢり
さしのとしまちとおわれてごしよと
うらくてひうしとはらくつうこれはぢり
やしの一人てとうしまちとみてうり
まんはいせんとさるせるくさきしんみわ

くくしるせるくてやしきんみるるかてくとも
てきえさうてけさうしとそせんくをば
きえさうてこずよのすだにつけさまふく
わくくとじちうさけとそくるよのすずよ
つけたまひけるさてざいくどもくるずよ
めつまくとまるてきずりひつしとみくぶお
こさうのすずととうしてしきやとみそあつミ
ラずとひらくよみとそひさつけられうう
ざい人のずうくべきやうふけまじきかなや
のるしとこうくくらんじやせばさぶ

がりのちうとまうそけてみうしとけう
きこうこれともわらがいやせぜしきんしん
のうことこせんとみきたまへじそのうここ
よしやんふそのつことうづあれものこう
すわくれさうざい人のうくべきさやうふ
しまうびうし冬とちよつけてさうるる
ここと申しそのあせとうこされと
たもとけたまへと大おんわげてあけきう
かしかすうずかうしとのずつうくうし
つゑのむくぬるれどそのうひもうく十五う

さんざんわつてしやうにあくとりうやりと
やりのとばちへとくひんてまうちなま
ひけつゝ又るもあくさとやりそのとどすぐ
まらずくよおとしたまふあり志いさいう
うむことなく気ずるのうすよいれてつき
つぎうてあり又気ずるのみよいれてひ
もとしきあくよろこぶくるてりものにんた
つよるうりいうくのせみとき気ゐうあり又
祝んずるのざやりじやとど十わうしのめざ
とらうえまりひそうやまいせたまふひろり

こふうひさるやうしのことちよちるのちう
よりゆきうへまて志るやのつせんとまち
こまんしも我ふうつそおよどもまいりや
座りん虎ぐちゞてにおとしやさえとや
せぜん十さしきうしめ二ちうへとまうちてミ
ようとおうなれ七くにうれけし座うと
みろうと気るよおうなれ百ゝ日よあり
けまてども三ちつ敏へもあし又おとよきもま
いりかんやちでにいれやしべきとアセで
十文しいうつ志西さいとまうちてのしくもとお

かやうにそれそれにちかうかくあやまちをもまうし
つみ人はそこのつみ人にくとまうしけるを
どもまうしたりども又だい三千年七罪人十三ね
三千三罪人まてもまうしたまへどもしやうだ
もそけんをかうこうろゆへにはりつよおはじ
のてはばかりておけんちかくにお
つみつうつくうむしもかし又あるく
うしとおとどもあまりつうさうとも
てんろうのゆみそてさしんきにいてせき
まこせさんくまうしゆくしけるこれはさや

じふてこえくしとこうさうしうしかへく
そうしたしきよろうしせられてせんとうけ
うらもの二三ちくろとうくうこしく三百ざいふう
されじはさやうとしこうしぜいせんりくとも
うくめうし願又人かしわまうしとりくれて
人のずまいうされじもこころそまうあはりの
かえろはらさどとうこれたしやうかうのそ
うよいうとしこういいかし又あるによ人の
みどのうへはつうざいでるあんなくらとさし
つかくはさけぶてものひまうもかし二れく

しやうじにておもきこせんゑんをすれハおんな
さかえけとかしそのこうまうちあすかへり
のおひざおみくをうくるかされども一人
くどくとせじうりふあろふころおしむ
みせんかくにわたるとし三つかきひこあり
一ぞんは上ぼんへまいるとて二ぞんにて
かけられとうり二ぞんはちぼんへまいるて
とてさろうさてうけとうり又げぼんよむ
まんてそのハおろてほのくとまいろうり
又くろんのもとしおりこれハあくへのま
うるはしおりさてもいんのきやしどもとこよ
とみをくまひけれはくるしこやしかく
ほとけうりこそんぎんのおうとみくらんずる
うえまいのとこうとおりせんがしくやし
のこころかりわりくやしよいつうくのこ
ずさとうくくうてとまいじるいきやしくん
じたまくとのべうるところにあり又えち
そのくるれつがうるもおりてひくらてお
つまあしきのくくをだいひのかせよろび
みせて二十あのかさうハうぐくとそろへあ

ごはひめとかうらたまへくてじやうゐんをゝんは
はらいりしたまへてじやうみんなかう
かうかうらもこそしもおよらずにつく
これをこそしやうじの称号もさだむべし
さてこそくのあうさゐとことく
のこゝずにつくにみゝちかうこのえいは
きやうくかうかくさうえとおゝせあつてさらば
にほんのとみのちかくぞくらくとぞじやうよ
みるこそおとふまこのはしらぞとら
ゆきてこゝせよとてこぞのさしとこそ

たまへるたゞしかんぢうのおひごゝろ
て三千三年といゝんときぞろくよみ
ほやまふそひろりしみづらがわうさまを
きやなそてさうるなりかゝる構ふらば
かんぢてたちまちころすべしみようら
もたすく色らずまことにこゞみのさかし
とうにくるべきぞそのときみづからを
うしなうとおほせありければにそとし
こまつてひとやしてきさろみまもとひ
きれざらくちるとや、ひめのこくよいるや

とぞよろこびてさてきこころとてゆめたてまつ
つる太ふやう小ふやうもれもくとまいりて
やのうちのこととききんとそぞでやきけり
それよりのちはみなとりあへずおほせられけ
るやうはにくきやつかなもんかわるとおぼしめ
わりけまでもさらにまつくしてくれやん
かきれけるをもしところよ又みたてまつ
きよれたるみちやうはおよのです人あるのい
それとうらく三ぞいまかこつりやせばふ
るまそんじやのみせつかりはわいおとらず

これとよくおがみまゐらせ候へばひと
つはちやうじの袮子りしきやかくしところ
をもあへずにてこはうて宮千一まてもある
くるる又そらよ上ゑわろそてよろしいりける
ぶつしやうとかくりてあるかひくこゑんらう
いのちとたゞいまやつさとらうことうり
らうらもたそてあくまじきことらんじつつ
たまへなどまうしにわるたまこそおがくろ
さそらよくのたいふやう小いふやうみでもた
まわりまかりかくりそれでにくさがたび

とくに二しよのせそくのくまれまうさん
こうおくうけうきうれどにまうてうしあく
たうしきやうだいめくてはうけさうあいをしと
又そもそのたいをしこの袮でうらとそうく
くは袮んぶつゃせんえんをしごやくしやと
しごくらくやうじやうの三名ゆんを袮ぶ
ひゃくしうまうひてこころとあしくすべう
らずされどまつこの含うたづつましころ
三名うちうさみてげんざいうられがんのだ
御しどくをおぼこたうまうよ上がんまん

だいよりんきやうせてむねうあり又きやうちうさ
きよろう御んむねなしごしとごあれうう
さうくうきがいおうべうしぞうらのせんげん
大がさいのおうがうれしとごもくのごとく
きうもとゝ袮あり

尼ケ崎
北口
塩万

ふしかあ

くあのとり

木屋勘兵

つるきの山

ぢゞくゞらく

ふしのやまさつのか

110X
589
1